

デンマークにおける高齢者の在宅ケア関連施設の視察 —日本の高齢者ケアにいかす支援と教育に関する考察—

梶井 文子¹⁾

Inspection of Home care-Related Institutions in Denmark —Considerations of Support and Education to Provide Care for Elderly People in Japan—

Fumiko KAJII, RN, RD, Ph.D.¹⁾

〔Abstract〕

The purpose of examining Danish home care practices is to broaden understanding of these practices and ideas of care, to consider the Danish system, the means of its support plans, and how education can improve elder care in Japan in the future.

It is clear that managers and staff must share ideas about and goals for care and believe in creating a rich living environment for residents of homes for the elderly.

Some have suggested creating an organization devoted to trying new ideas and alternative plans based on reforms, creating a comfortable workplace, showing respect for the qualifications and ability of the staff, and pursuing the aim of improving staff members' personal abilities and qualifications to find solutions to the problems associated with upholding high standards in care organizations.

Second, a care policy for the elderly, known as "Help to Self-Help," was developed to help elderly people reach their maximum levels of independence and self care. Subjects embraced the use of supporting apparatuses and appliances of care, and this proved beneficial for both caregivers and the elderly care recipients.

The heart of human health services education must involve carrying out occupational ethics education and showing respect for human nature and an understanding of humans' sense of values.

It was suggested that planned trainings of health care employees are important for the formation of basic standards for such employees.

〔Key words〕 Denmark, inspection, elderly people, home care, education

〔要旨〕

視察の目的は、デンマークの高齢者の在宅ケア関連施設のケア実践とその理念を理解し、今後の日本の高齢者ケアにいかすことができる支援体制や内容、教育のあり方を考察することであった。

利用者の生活環境の豊かさと同様に、管理者・職員がケア理念や同一の目標を共有が重要である。さらに組織として高い水準で問題解決を第一に行うために、高い満足度を持ち働ける職場、職員の資格や能力の尊重、個人の技術・資格向上やアイデアや代案を試みる組織改革が求められていた。高齢者のための

1) 聖路加国際大学 看護学部 老年看護学 St Luke's International University, Gerontological Nursing

「Help to selfhelp」へのケア方針が徹底され、高齢者自身のできる力を最大限にいかすケアが実施できていた。要介護者の自立を促すための補助機器や器具をうまく活用し、介護者と要介護者の双方に効果的な使用を行っていた。ヒューマンヘルスサービス教育では、職業倫理教育を徹底することや、「思いやりの心」を持つことは、人間性の尊重、人間の価値観の理解となる。ヘルスケア専門職として基本的な資質の育成には、長期的目標の元での計画的な育成が重要であることが示唆された。

【キーワード】 デンマーク、視察、高齢者、在宅ケア、教育

I. はじめに

日本では2012年から「医療・介護・福祉」の一体型の地域づくりとして、地域包括ケアシステム「住み慣れた地域で老いる」社会をめざした施策が始まった。デンマークでは1970年代後半から、「住み慣れた地域でその人らしく最期まで」というエイジング・イン・プレイス（地域居住）の政策理念への改革¹⁾が進められ、1980年には在宅24時間ケアが整えられた。1988年には、高齢者施設としてのナーシングホーム「プライエム」の新規建設が禁止され、現在の高齢者の住まいは、「高齢者住宅」として提供されている²⁾。そこで本視察では、社会福祉国家のデンマークの高齢者の在宅ケア関連施設のケア実践、ケア理念を理解し、今後の日本の高齢者ケアにいかせる支援内容や、教育のあり方を考察する。

II. 方法

視察時期：2014年6月23日～26日

場所：デンマーク王国の第2都市のオーデンセ市、第1都市コペンハーゲン³⁾近郊のシャロットテンランド市とゲントフテ市の高齢者ケア関連機関4カ所（表1）を視察した。写真の撮影時には、論文ならびにWebへ掲載することの同意を、当事者から得た。

III. 結果

1. 視察先 Odense Kommune Hojstrugruppen

1) 施設ならびに訪問スタッフの概要

オーデンセ市営の訪問介護センター18カ所のうちの1つである。デンマークでは、市が対象者に医療・福祉サービスの有無を判断し、市営または民営サービスを提供する。訪問介護の主役割は、身体介護、簡単な服薬管理、栄養・食事提供である。朝7時から前日の夜勤者からの引き継ぎとその日の訪問予定についてのミーティングを行う。訪問担当者は、スマートフォン（またはタブレット端末）から、訪問時間やケア内容等の確認や記録を行う。地域別の固定チーム制だが、交代で訪問可能となるように利用者情報を共有し、シフトも調整を行っている。

1地区10名前後のスタッフで、3地区別にチームを構成し、社会保健ヘルパー（SSH：後述）23名、社会保健アシスタント（SSA：後述）12名、実習生4名、管理職2名、フレックスジョブ者1名、代用要員5名からなる。SSHは身体介護と食事・栄養ケアが役割であり、SSAは服薬管理も行い、医師への問い合わせや指示を受けてケアができる。1日は、2シフト制（7-13時、13-15時）の日勤と、15時以降の夜勤の計3シフト制である。登録利用者は、1人暮らしの要介護高齢者、精神疾患者、認知機能低下者、アルコール依存者等の約350名である。訪問地域は、最大約5～6km範囲であり、雨天以外は、電動付き自転車で訪問している。

2) 近年のオーデンセ市のケア方針とケア体制の変化

2011年より①利用者本人の身体機能を重視するケア方針と、②Welfare Technologyが導入された。①は利用者の長期的視点に立ち、リハビリテーションと「Help to selfhelp」の方針で、利用者自らができていることを大切に重視すること、自らができるようにトレーニングすることを意識し、SSAらは、すぐに手を貸すケアを行わずに、利用者本人の力や安全を傍らで見守り、その利用者が時間がかかっても自分で行えるように意欲を引き出す支援を行っていた。②は介護現場に新しい機器を導入し、人的ケア（人の手によるケア）と機器類を使用したケアを融合し、要介護者や介護者の双方に有効かつ効果を得られることを目指した（後述）。

3) 社会保健アシスタント（SSA）に同行した在宅訪問介護の事例

SSAに同行した7事例のうち上記の①②を示す3事例を紹介する。7事例は、同じ高齢者住宅内の住民である。高齢者住宅は、すべて平屋の3、4戸から1棟を構成し、各棟の間は広大な庭（写真1）のある計約40戸から構成されていた。1戸は寝室、LDKならびにバスルーム（写真2-4）からなり、入居者は主に独居高齢者、要介護高齢者ならびに障害者である。

(1) 食前インシュリンの投与が必要なA氏（女性）（滞在時間は約35分）

独居のA氏は、インシュリンによる血糖管理と、毎食の食事の準備と服薬管理がケアニーズであった。SSAは、健康状態を確認後、本人の好みに応じ冷蔵庫内から

表1 視察先の概要

	項目	内容
1	視察先名 所在地 担当者（役職） 視察内容	Odense Kommune Hojstrugruppen（オーデンセ市訪問介護センター） Hojstrupvej 51,5200 Odense（オーデンセ市） Ms. Lone Susanne Hanse（センター長，社会保健アシスタント） 在宅の訪問介護士に同行し，障害者ならびに高齢者の在宅ケアの現場を観察する。また高齢者の生活環境，自助具ならびに生活サービスの活用状況，実際の訪問介護士のケアの内容を観察する。（訪問介護の場に7件同行）
2	視察先名 所在地 担当者 視察内容	Social-og-Sundhedsskolen FYN（ソーシャルヘルススクール：介護士養成学校を含む） Athenvanget 4, 5250 Odense SV（オーデンセ市） Ms. Karin Bannow（進路指導担当官） 介護ケアスタッフの養成・教育体制（プログラム）や供給体制等
3	視察先名 所在地 担当者 視察内容	Holmegårds parken（現在，プライエムからプライエボーリへと改修中） Ordrupvej 30,2920 Charlottenlund（シャロッテンランド市） Ms. Connie Engelund（施設長，看護師） 旧ナーシングホームの生活環境，特徴，介護型住宅への移行を見学する高齢者の施設ケアの内容，ケア態勢・組織作り
4	視察先名 所在地 担当者 視察内容	DK-Pleje（民間ホームヘルパー派遣会社） Søborg Hovedgade 119, 2860 Søborg（ゲントフテ市） Mr. Benjamin Ait（社長，社会保健アシスタント） 民間の訪問介護ステーションを訪問する。 訪問介護の現場に同行し，介護内容を理解する。 （訪問介護の場に3件同行）

雑穀パン（デンマークでは黒パンと呼ばれる雑穀シリアルが混合されている伝統的なパン），チーズ，ハム，飲み物を配膳トレイ上に準備した。食前血糖値測定後，冷蔵庫内の鍵付きの薬箱から取り出したインシュリン量を計測し下腹部に皮下注射し，その後約15分A氏の様子を見守った。

(2) 様々な生活行動の支援が必要なC氏（女性）（滞在時間は約40分）

C氏は，食事と整容行為以外のシャワー浴（デンマークでは入浴はない）のADLは，自立困難な状況であり，立ち上がり補助機器（写真5）を使用し離床している。機器を使用し，本人も介護者も共に心身において安楽な移乗ができ，C氏は「車椅子に乗ることを遠慮せずに頼めるから助かる」と気軽に話してくれた。

(3) 弾性ソックスの着用の手伝いが必要なE氏（女性）（滞在時間は約15分）

E氏は，心不全があり両下肢静脈瘤や下肢筋力の低下により歩行にふらつきがあるため，ゆっくりと慎重に室内を歩行する。SSAは手を貸さずに，その様子を近くで見守った。SSAはゴム製の風呂敷大シート（弾性ソックス着用補助具）で片足を包み込み，その上にソックスのつま先を被せ，E氏はフック式器具を使用し，ソックスを膝下の位置まで自分で引き上げた（写真6）。最後にソックス内の残存シートを除去した。傍らでSSAは笑顔で見守った。E氏はほぼ一人の力で弾性ソックスを履くことができ大変満足そうであった。

2. 施設先 Social-og-Sundhedsskolen FYN

1) 施設概要

オーデンセ市内にあるソーシャルヘルススクール（Social Health School）。社会保健ヘルパー（SSH）・社会保

健アシスタント（SSA）や障害児のケアに携わる職（生活相談員）の養成のための専門学校であり，フュン島内に4カ所ある中でも最大規模である。

2) SSHとSSAの養成カリキュラム⁴⁾ (図1)

デンマークの義務教育は，小学校・中学校の9年間と幼稚園1年の10年間である。義務教育後は，将来の職業別のコースとして，普通高校，工業高校，商業高校，職業教育学校（本スクール等）を選択する。ここは，義務教育卒業後の15歳以上者が入学でき，SSHとSSAの資格が得られる。さらに上級に進む専門学校以上レベルには，看護師らの専門職となるスクールがある。

入学試験の代わりに初めにGrundforløb（準備教育）を5カ月以上（最大15カ月）受ける。ヒューマンヘルスケアに関わる職業人となるための倫理的教育や，施設見学等を行い，自分の適性のための試行期間の後に正規の教育課程に入る。SSHコースは1年2カ月であり，SSHは医療行為を行わないが，知識は必要とされる。特に在宅ケアは，サービスの様々なサービス種類（市，町，社会，団体等）を知る必要があり，対象者の生活に関わるため，「いつもとは何か違う」という気づきを感じることが求められる。その根拠や理由を自らが判断することより，SSAや看護師にその状況を正しく伝え，相談できるように，対象者の健康，加齢に伴う心身の変化，特に高齢者はボディランゲージから本人が何を希望しているのかといったニーズを把握する方法等を重点的に学習する。個人の生活背景を理解し，個人の強みを引き出すコミュニケーション技術を重視していた。SSA教育は1年8カ月であり，疾患や障害の理解，判断方法，薬剤の管理などの簡単な医療処置を学習する。入院期間の短縮により在宅生活への移行の推進から，在宅ケアではSSAの人材育成が求められている。SSAは，高齢者，



写真 1 高齢者住宅の敷地内



写真 2 高齢者住宅の居間



写真 3 手すり付きトイレ



写真 4 バスルーム (シャワーチェア)



写真 5 立ち上がり補助機器



写真 6 弾性ストッキング装着器具 (シートと専用フック)



写真 7 居室外の中庭



写真 8 家具や装飾品を持参した居間

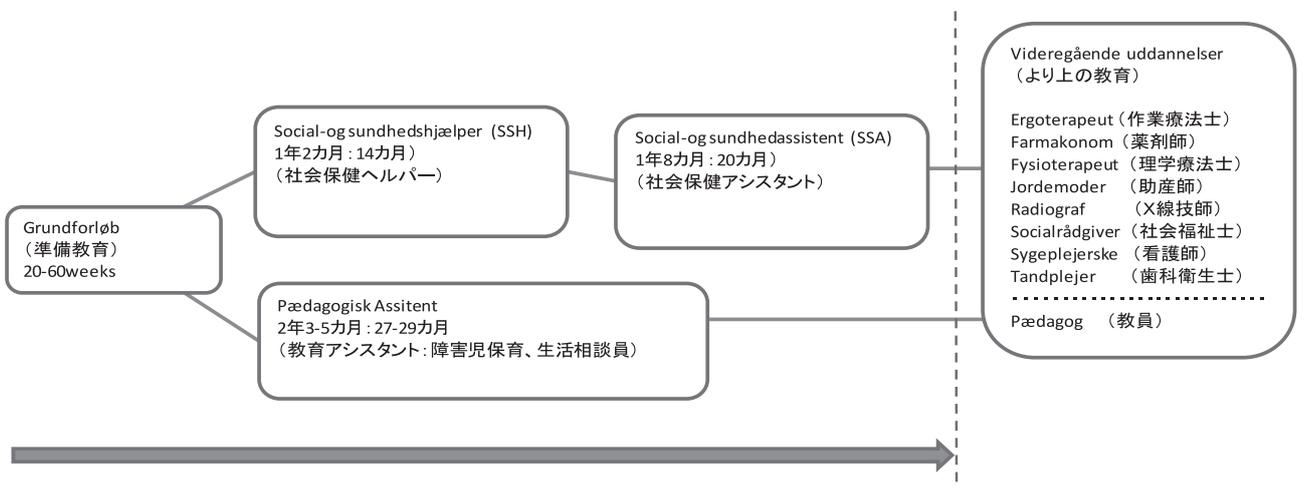


図 1 Social-og-Sundhedsskolen FYN の教育⁴⁾

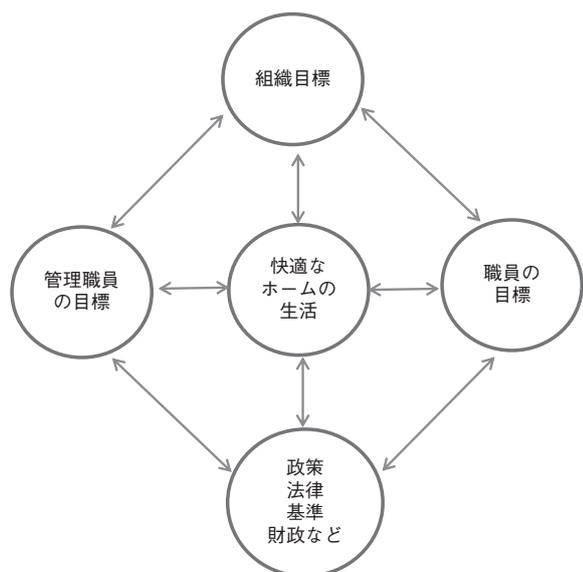


図2 Holmegårds parkenの組織理念モデル

精神疾患に対して、在宅だけでなく病院、24時間スタッフ付きの高齢者ケアセンター、精神施設等の幅広いエリアで働くことができる。SSHならびにSSAのカリキュラムは、理論と実践（実習）、そして理論で反復確認形式をとる。実習先の専任の臨床指導者が配置され教員と協働して学生を教育する。臨床現場での様々な状況に対する応用力・対応力の育成のために、最終試験は、学生1人の発表形式によって、知識量ではなく置かれた状況の中で、どのように考え問題解決に導くかの思考プロセスの確認に重点が置かれている。

3. 視察先 Holmegårds parken(ホルメゴースパーケン)

1) 施設概要

(1) 歴史

1859年に医師が市民の寄付を得ながら、大学の敷地内に施設を創設し、移転しながら、1986年に現在の名称となった。ナーシングホーム（プライエム）としては国内最古の施設である。現在大規模改修工事により、2015年春には地域住民にも開放し、子供の遊び場もある介護型住宅（プライエボーリ）としての高齢者住宅になる予定である。改築予算は、ホームと市が各7%、国86%の30年ローンで補助を受け、市との共同運営とされる。新ホームは6棟で入居者総数120名、職員数250名である。在宅独居の困難者が対象である。現在の平均待機月数は2カ月、最大4カ月以内には入居可能である。職員は、看護師、SSA、SSH、理学療法士、作業療法士、庭師、修繕担当、清掃員、栄養士からなる。1棟ごとにキッチン、オープンカフェがあり、手作り食が提供され、近所の住民も利用できる。1棟は2ユニットで、1ユニット10名の入居者からなる。1棟1名のリーダー（看護師）は24時間の責任をもつ。7時-15時の日勤勤務は、SSA3名、SSH4名の計7名、15時-23時の準夜勤務

はSSA、SSHの計5名体制、23時-7時の夜勤はSSA1名で構成される。現在この施設では人材不足は生じていない。

2) ホームの組織理念モデル（図2）

現施設長の看護師コニー・エンゲロン氏により掲げられた組織理念モデルと目標をもとに、全職員に教育を行い、職員が常に問題意識を持ち、建設的な話し合いを利用者や家族と共に行い職員満足度と快適なホームの生活のためのケアならびに組織の質を向上させた。

3) 新ホーム内の環境

居室外の中庭（写真7）、家具や装飾品を持参した居間（写真8）、採光を取り入れ、床は木製、天井もコルク製のため、歩行時の負担軽減や音を吸収しやすくするなど、防音と光と床に配慮した人に優しい住まいに配慮されていた。

4) 生活費用

住居と食費等で日本円約25万円/月の換算で個人や市からの支払いとなる。

4. 施設先 DK-Pleje(民間ホームヘルパー派遣会社)

1) DK-Pleje ヘルパー派遣会社の概要

市の許可を受けた民間経営のヘルパー派遣会社である。現在30~40名のスタッフが3交代する。7日間勤務後、7日間休みの勤務形態である。日勤を20-30時間/週、夕勤または夜勤をその他の時間数にして合計37時間勤務である。

2) SSHとの同行訪問

(1) 個人宅への食事準備と家屋内の清掃（30分程度の滞在時間）

20代の明るく人懐こい優しい笑顔の女性SSHは、高齢者と同じ高さの目線で優しく話しかけ、健康状態と今の希望をまず確認した。本人が食事中に掃除等を手際よく行っていた。その間高齢者に気を配り、時々優しい声をかけ安否確認していた。

(2) ケアが必要な場合の専用の集合住宅での一人暮らしの方への安否・健康状態の確認

集合住宅の複数者への訪問時は、有効的に時間を活用するため、午前中に身体介護と家事等、午後は安否確認や本人の心身機能に応じたアクティビティ等を行う。一人暮らしの高齢者は、「一人は慣れているが、SSHが訪問することで気持ちが明るくなる」、SSHは、「一人でできることが多いが、相談したいことやして欲しい小さなことがある」と話した。

(3) 疾患・障害のある高齢者世帯への家事支援

夫は車椅子での移動、妻も疾患があり家事の負担がある場合、SSHの役割は、家事支援自体は軽度だが、訪問時の会話が、サービス利用者の精神的な支えとなることが一番大きいと話した。

IV. 考察

デンマークの高齢者の在宅ケア関連施設のケア実践の視察から、今後の日本の高齢者ケアにいかせる支援体制や内容、教育のあり方を考察する。

1. 高齢者ケアにいかすことができる支援内容や体制

利用者の「快適な生活」には、管理者と職員のケア理念や同一の目標の共有が重要と考える。職員は居住者とその家族からの提案や意見を受容し、組織として高い水準で問題解決を第1に行うために、管理者と職員間の意見交換が十分行われ高い満足度を持ち働ける職場が必要である。職員の資格や能力の尊重、個人の技術・資格向上やアイデアや代案を試みる組織改革が求められる。デンマーク国内ではICT普及率が98%であるため、職員間の組織内連携だけでなく、家族ともICTを活用し情報交換を密に行い、信頼関係を保つことへの活用は、日本のケアにもいかせる点である。

また日本との違いは、高齢者の「Help to selfhelp」方針が徹底され、高齢者自身のできる力を最大限にいかす考えをどの職種も共通認識し、実践できている点であり、業務の効率を重視する業務中心型ケアの日本とは全く違っていた。さらに介護者や要介護者の双方に補助器具が有効利用されている点である。高齢者や障害者の起居に伴う体位移動動作の介護は、重介護な労働であり腰痛を起こす可能性が高い。人の体位移動にリフト等の機器を使用すると人をモノ扱いしているように一般的に考えられがちだが、介護者の腰痛を防ぎ、長期休職の減少につながる。日本では介護用機器の開発は進んでいるが、利用者と介護者の双方への活用が不十分と考える。障害者や高齢者、そして介護者が同じ土台で理解し共存しあえる社会風土が日本で培われる必要がある。デンマークの労働環境法では、介護者の労働条件を「補助器具を使わなければならない」と規定し、補助器具が被介護者だけでなく、介護者のためにもあるという理解が国民全体に浸透されていると感じた。

2. ヒューマンヘルスサービスの人材育成のための教育体制

全ヒューマンヘルスケアサービス教育の初期に、適性の査定と職業倫理教育を共通に受講できることは、患者・利用者や、チームで働く同職者や他職種者に影響を与えるため非常に意味のあることだと考えた。またケア技術

よりもその根幹をなす倫理の学習を先行する順序性も、その後のケア技術の質の保障に影響を及ぼすと考えた。SSA教育は、日本の基礎看護教育1,2年次に相当する。日本では看護職と介護職の教育システムが独立しているため、職業倫理に基づく諸課題が臨床現場で起こりやすい理由の一つであると考えた。

デンマークは国民が満足できる社会や社会保障を、国民自らが考え、戦後の経済福祉国家への長期政策を立てた。社会福祉政策の中で、社会的弱者に日常で接する保健・医療・福祉職は、「思いやりの心」を持ち、人として互いの人間性の尊重と価値観の理解が必要である。日本では、ヘルスケア人材の早期育成や専門的技術の強化が期待されている。本視察を通じて、高齢者ケアに関わる看護師をはじめとする多職種の人材育成のためには、短期育成ではなく、長期的な目標に立った計画的な教育と人材育成が重要であることが示唆された。

本視察は、聖路加国際大学ミセス・セントジョン記念教育基金の助成を得て行ったものがある。

引用文献

- 1) 松岡洋子. (2009). デンマークの高齢者福祉と地域居住 最期まで住み切る住宅力・ケア力・地域力. 第1章, デンマーク高齢者住宅の歴史. p 22-23. 東京: 新評論.
- 2) 松岡洋子. (2009). デンマークの高齢者福祉と地域居住 最期まで住み切る住宅力・ケア力・地域力. 第3章, デンマークの住宅政策. p 130. 東京: 新評論.
- 3) Wikitravel The Free Travel Guide. <http://wikitravel.org/upload/ja/f/f5/Da-map.png/2014.10.15>.
- 4) Social-og-Sundhedsskolen FYN. Follow your Heart-beat-sæt fokus på liv.

参考文献

- 1) 千葉忠夫. (2014). 世界一幸福な国デンマークの暮らし方. 東京. (株)PHP 研究所.
- 2) デンマーク大使館. <http://japan.um.dk/ja/infor-about-denmark/denmark/2014.10.15>.
- 3) ケンジ・ステファン・スズキ. (2012) 消費税 25% で世界一幸せな国デンマークの暮らし. 東京. 角川SSC 新書.
- 4) 西村周三監修. 国立社会保障・人口問題研究所編. (2013) 地域包括ケアシステム「住み慣れた地域で老いる」社会をめざして. 東京. 慶応義塾大学出版会.